

先週の第四回は、『テンペスト』を取り上げました。“Tempest”という英語は、「大きな嵐」を意味する古フランスが語源で、「季節」や「時」の意味が響く言葉でございます。

「時」に関連して、プロスペローの年齢に少し触れてみたいと存じます。

主人公プロスペローは、かつてミラノ大公でした。ところが魔術の学問に没頭するあまり、弟に大公の任務を全て任せてしまったのです。シェイクスピア劇に登場する兄弟たちの関係はあまり良好とは申せませんが、この劇でも、野望に燃えた弟アントーニオはミラノ大公の地位を奪った上、兄プロスペローとその三歳にもならない幼子ミランダを朽ち果てた小舟に乗せて放逐しました。幸運にも、二人は現在の魔法の島に漂着します。プロスペローは、十二年間、魔術の学問に専念し、弟への復讐の機会を待っていました。

プロスペローの令嬢ミランダは、父親以外の人間を知らない純粹無垢な少女でございます。最後の場面でプロスペローが死を想うセリフを述べることから、プロスペローは年老いた大公と考えられがちです。けれども、ミランダの年齢を考えますと、リア王ほどの老人とは思えません。恐らく四十代だったのではないのでしょうか？仮にプロスペローが四十代と仮定しますと、シェイクスピアとほぼ同年代でございます。シェイクスピアは、同じ年頃の主人公の心中に思いを巡らせ、執筆したのかもしれませんが。

1611年11月1日に『テンペスト』を宮廷で上演した時、パトロンのジェームズ一世（1566-1625）は四十五歳、シェイクスピアは四十七歳でした。読者や観客としてではなく、時には演出家の立場で登場人物の年齢を想像し、ご自分の配役でシェイクスピア劇の仮想上演をお楽しみになるのも一興かと思えます。

では復習に戻しましょう。『テンペスト』は第一・二つ折り本の喜劇部分の冒頭に配置されていますが、この劇も、正確には悲喜劇のジャンルに属す劇でございます。他の悲喜劇と異なる点は、『テンペスト』がヘンリー八世との関わりがないことでございます。妖精が登場する点では、『真夏の世の夢』と類似性がみられます。『真夏の世の夢』では、民話的な妖精が登場しました。一方、『テンペスト』では、空気の精エアリエル、地の精キャリバンのような、スイスの錬金術師パラケルスス（1493-1541）的な霊なのです。

シェイクスピアの大部分の劇には、材源（“sources”）がございます。ところが、『テンペスト』は数少ない例外で、主たる材源はございません。1609年にヴァージニアに向かう船隊のシー・ヴェンチャー号という船がバミューダ諸島沖で難破し、その時の珍しい経験を記したパンフレットが、1610年に出版されました。このパンフレットが、シェイクスピアにインスピレーションを与えたものと思われまふ。

劇の舞台は、地中海のチュニスとナポリの間にある孤島です。第一幕第一場では、激し

い嵐のために、ナポリ王と王子、プロスペローの弟で現ミラノ大公などが乗船する船が難破しました。ところが、次の場面で、プロスペローは、激しい嵐が魔術の生み出した偽の嵐に過ぎないと娘ミランダに告げ、さらに、ミラノ大公だった過去やこの島に住むに至った経緯をミランダに初めて語るのです。

島の支配者プロスペローには、二人の召使、エアリエルとキャリバンがいます。エアリエルはプロスペローの忠実な召使です。プロスペローの指示に従い、島に漂着したナポリ王子ファーディナンドを誘導してミランダと会わせませす。お決まりのように、若い二人は一目で恋に落ちました。王子のミランダへの愛を試すために、プロスペローは丸太運びの辛い試練を与えるのです。

島に漂着した一行の中には、十二年前、プロスペローの小舟に日用品や食料に加え、大切な魔術の本を潜ませた心優しい老顧問官ゴンザーローもいました。彼は理想の国家を論じます。この部分は、モンテーニュのエッセイとトマス・モアの『ユートピア』の影響がみられます。神父様は、ゴンザーローのモデルはトマス・モアではないかとコメントなさいました。

次に、二人の船員が登場。キャリバンは二人の船員を利用して、プロスペローへの復讐を試みます。『ハムレット』、『ヴェニス商人』、『テンペスト』は復讐劇でございます。ナポリ王アロンゾー、弟セバスティアン、現ミラノ大公アントーニオの三人は、プロスペロー追放に関与した罪人です。アントーニオは、眠っているアロンゾーを殺してナポリ王位を奪えとセバスティアンをそそのかしますが、エアリエルが阻止します。

プロスペローは、苦役を果たしたファーディナンド王子にミランダとの婚約を許し、祝いの仮面劇を上演します。劇中仮面劇に関して、神父様は、この部分はベン・ジョンソンに書いてもらったと思うと解釈されました。仮面劇の最中、プロスペローはキャリバン一味の陰謀を察知し、突然、中止を命じます。

プロスペローは復讐を果たすつもりでしたが、空気の精に過ぎないエアリエルでさえ慈悲心を持っているのに気づき、全ての敵を許し、魔術さえも捨てました。ミラノ大公に復位したプロスペローは、ファーディナンド王子とミランダのナポリでの婚礼に列席した後は、ミラノに戻ると告げます。エピローグでは、プロスペローの姿を借りたシェイクスピアが、舞台への決別を謙虚に観客に語りかけます。この後、シェイクスピアは、レキュザントの娘スザンナの住む故郷ストラットフォード・アポン・エイヴオンにもどりました。

## 第二部 質疑応答

質問：シェイクスピアは第三幕で仮面劇を用いていますが、当時、宮廷における仮面劇の流行を取り入れたのでしょうか？

お答え：ジェームズ一世の王妃アンは仮面劇を大変好みました。ご講義の中でも指摘なさ

いましたが、劇中仮面劇は、シェイクスピアではなくベン・ジョンソンの手によるものと思いますとのお答えでした。

恒例に従い、引用個所を神父様に倣って朗読して秋期第四回目を終了いたしました。